

天声人語

青年は「万葉集」を携えて入隊した▼虚飾を排し、真情を歌いあげる万葉集をこよなく愛した。しかし当時の日本は文学どころではなかつた。家族を思う本音すら語れない。生還を祈りながらも「お国のために死んでこい」と送り出さねばならぬ風潮を嘆いた▼終戦時は26歳の海軍士官。戦後は史学に打ち込み、「古事記」「日本書紀」にある誇張や宣伝臭、朝廷賛美を鋭く見抜いた。古墳時代に王権の交代があったという見解を唱え、脚光を浴びる。月初め、100歳で亡くなつた▼大阪市立大学で歴史を教えるかたわら、遺跡の保存運動に力を尽くす。奈良県吉野町のゴルフ場建設では反対の先頭に立ち、代わりに「万葉植物園」の建設を訴えた。万葉ゆかりの景勝地の保全を求めた和歌の浦訴訟も支援に入つた▼「戦いに負けて日本はよくなれどそのため死にたる人の多さよ」（はじ多き一生なれどけんめいに生ききていつか九十六歳）。晩年は歌作に励み、朝日歌壇にもその名がたびたび登場する。技巧に走らす、戦争世代の実感をまっすぐに詠みこんだ▼率直であれ。真意を偽るな。そんな信念が、研究や保護運動、短歌を貫く。まさに「万葉調」の人生ではないか。「文弱の徒」であるかに見えて、たぐいまれな闘志の持ち主であった。

2019・2・19